

追憶

愛知県 山口泰一

昭和十五年七月、親戚をたよって、満州新京へ、幸い不具の身であり、又独身でもあるため、思いきって渡済した。

約一か月後、満州中銀の管財課に就職、十九年、中銀の関連会社の設立に参加する。

通化省通化市を本拠地として酪農経営に本腰を入れ、その頃、結婚して二人の子どもを持ち、やっと安堵したのも束の間、昭和二十年五月、召集された。私は運よく家族の住む通化市の新設部隊に配属されたため、現在まで生存することができたのである。

配属された部隊に入隊はしたものの、早朝より夜遅くまで訓練訓練の日々、隊員は四十歳以上の兵隊ばかりだった。当時通化市内の大きな建物にはソ満国境方面に住んでいた人達が主人を召集され残った女子供達

が、通化は安全と見てか、政府の指示で何百人かが避難して来ていた。自分達家族の住んでいる三階建のビルも一階を解放して、百人余りに提供した。

八月十五日、終戦の詔勅を聞くと同時に、右往左往、日本始まって以来の出来ごとでもあり、今後どうなるのか、中隊長でもわからなかったであろう。その夜は、通化近在に住んでいる避難してきている女、子供が隊内になだれこんできて、「兵隊さん、私達はこれからどうすればよいの」と、泣いて泣いて顔を泣きはらしていた。「私もあなた達と同じ日本人、生きるも死ぬもみんな一緒だから、とにかく今晚は帰って休みなさい」と言うが、夜のふけるのも忘れてなかなか帰らない。

翌十六日、中隊長の部屋へ行ったところ、隊長室はもぬけのから、その夜のうちに逃亡していた。私は家が近くなため、中隊に残り、本部と連絡をとりあつて、最後まで残る覚悟であった。

敗戦のことばを聞いて三日目だったと記憶している。ソ連軍、八路軍、朝鮮の義勇軍が一挙に進駐して

きた。進駐軍の幹部へ兵器の残りを渡す。

帰宅して何日かが過ぎたある日、ソ連軍の将校がきて、ピルのあけ渡しを命じられ、数日の間に立ち退きをする事になった。

昭和二十一年一月一日、二日にとんでもない事件が起きた。私達の仲間が国民党のスパイの手先になったといわれている通化事件。元旦の朝、進駐各部隊の本部に、日本の敗残兵が棍棒を持ってなぐりこみをかけたのである。事前に参加名簿を取られてしまった。結果は不成功。そのため、私達の住居に機関銃をすえつけて攻撃、男は全部つかまえられた。満州電業の防空壕に放りこまれ、一日一杯のコウリヤンを水で溶きうすめたのを、おわん一杯。栄養失調で死亡者も出た。約二か月間、防空壕内で生活。

いよいよ調査が始まった。満州事変当時、捕虜となつて、その当時は八路軍の幹部で、護衛つきの日本人が、取調べる。暴動に参加したかどうかの取調べ、名簿を前においての調べのため簡単で、私は参加していないので、こちらへ行け、暴動参加者は左へ行けとの

仕分けである。それが終ると民衆裁判。暴動に参加していない兵隊は無罪放免、参加した兵隊は、ソ連軍の指揮下でソ連に行ったのである。

いよいよ日本に引揚げる時期到来、この日は日本人が夢にまで見た日である。

真夜中、通化駅に集合、無蓋車に乗車、持ち物はリュック一個のみ。列車は発車した。何はともあれ、我々は日本へ帰れるんだという嬉しさでいっぱいだった。

列車がとまった。もう夜が明けている。列車の機関手が金を要求している。私の隊は千円出した。列車が走り出した。又、列車がとまった。鉄橋破壊のため、列車はここまで。下車して、中国人の馬車を雇う。リュックのみ積みこみ、人は歩く。昨夜以来、何も食べていない。附近の田畑にはウリ、スイカが沢山ある。盗みに行く。

隊の一人が赤ちゃんの調子がおかしいと言ってくる。行つて見ると、ぐったりしている。間もなく死んだ。捨てることは出来ない。お母さんは、おんぶして

行くと言う。しかたがない。何はともあれ、奉天までの辛抱だ。列車から馬車、馬車から列車、でも日本に帰るんだと、みんな頑張った。

待ちに待った奉天に着いた。

しかし、死亡した人が三人もいる。早速、奉天の火葬場へ。でも火葬場とは名ばかり。こもにまいて名札がつけられた死体が山と積まれている。焼いているのは日本人の子供だ。順番を待っていれば時間がかかる。お金をつかませて早く焼いてもらうのがいちばんだ。帰って来たら、明日、錦州へ出発だの命令。錦州で一週間は、馬小屋で、馬なみの生活だったが、そんなことは問題ではない。

コロ島からの乗船当日は雨であった。無事乗船できた。しかし、船の中で死亡した人、目の前に日本を見ながら息を引きとった人もいる。残念であったろう。引揚げては来たが生活の労苦が待っていた。戦後四十六年過ぎて、当時のことは少しも忘れることはない。

私の終戦

愛知県 鶴見 順市

私は関東軍の傘下六八八部隊の系列下で、満州から日本まで食糧品を運ぶ船を二十四時間、三交替制で配船管理をした。軍の暗号電報が八月十二日午後八時に入電、十三日、十四日、十五日と、敗戦処理のため、軍関係の資料を毎日焼き続けた暑い暑い毎日だった。戦用品保管者としての私の印かんの押しであるすべての書類を焼いたつもりでしたが、八路軍の指名手配で、三回囚われ、追求を受け苦しみました。幸い、親しくしていた中国人の代表が数人来てくれて、鶴見は良い奴だ、我々が責任を持つからと、三度とも一日で出してもらいました。

南満州営口市での仕事でしたので、八月十九日の但し書きの無い五時間以内の立ち退き問題には驚きました。当時、営口の人口約二十万人、そのうち、日本人